



筑紫女学園大学リポジット

西アジア考古資料と近代日本文学 : 円筒印章（シリンダー・シール）の小説への登場形態

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/114

西アジア考古資料と近代日本文学

～ 円筒印章（シリンダー・シール）の小説への登場形態～

大 津 忠 彦

“Cylinder Seal” and its Appearance in the Japanese Modern Novels

Tadahiko OHTSU

はじめに

円筒印章（シリンダー・シール）は、古代西アジア地域特有の印鑑である。近年これを集成し研究したひとりD. コロンによれば、円筒印章は「その名前が示すように、基本的には小さな円柱形を成し、一般に石製で、これを粘土上に転がすと連続した反転図柄の印影が連続してのこるように円柱曲面上に図柄が陰刻されている。ほとんどの印章は、紐やピンで身につけるように縦に穴があけられている。形、大きさ、材質、図柄の様式は時代毎、また地域毎に実に様々である」(Collon 1987)。

いますこし時代、分布域に関して考古学的に特徴付けると、円筒印章は「南部メソポタミアすなわちバビロニアにおいて紀元前4千年紀のウルク後期にシュメール人によって発明され、ウルク期末からジャムダト・ナスル期にかけて西アジア一帯に広がった。ジャムダト・ナスル期末から初期王朝期にかけて、バビロニアに侵入してきたアッカド人も、シュメール人とともに新しい図文を採用し、また楔形文字を加えるなどして多くの円筒印章をつくった。紀元前1600年頃、バビロニアを侵略したカッシュ人もその伝統を継承し、アカイメネス朝ペルシアまで続いた。紀元前331年から翌年にかけてのアレクサンドロス大王によるバビロン、スサ、ペルセポリスの占領は、ペルシア帝国を崩壊させ、円筒印章もこれをきっかけにして姿を消した」(小野山 1985)。

すなわち、「紀元前4千年紀のウルク後期」から「ペ



図1. 粘土板への楔形文字筆法と円筒印章印影（復元）(Chiera 1938)



図2. アッカド/バビロニア期円筒印章の新印影 (Basmachi, 1975/1976)

ルシア帝国崩壊」までの時期に西アジアで使用された、基本的には石製の印章である。また、古代西アジアの上記各時代にあっては決して特異な器物ではなく、むしろ必需品として多用されたいことが、その出土状況から窺い知れる。たとえば、筆者もその発掘調査にわずかながら関与したテル・グッバ遺跡（イラク）にあっては、発掘対象域の広範囲にわたり円筒印章あるいは印影土器（＝円筒印章による押捺を有した土器）の出土が見られた（井 1988）。

材料となった石自体の美しさ、さらにはそこに刻まれた図柄の多様さから、円筒印章への関心、研究の歴史は決して短くはない。研究史に言及した先年発表の論考中に、H. Frankfort 著 *Cylinder Seals: a Documentary Essay on the Art and Religion of the Ancient Near East* (London 1939年) が「彫石美術に重点を置く研究の成果として一時期を画した」（小野山 1996）ものとされ、確かに、日本の先学をして「『^(ママ)筒形印章』の大著にオリент学への興味をかき立てられ」（定金 1962）た、と言わしめていることから首肯されよう。

I . 西アジア考古学と円筒印章

円筒印章もまた、他の多種多様な考古資料同様、その真価が明確になるまでの前史があり、資料に対する認識・解釈は時々において異なる。考古資料ましてや「文化財」としての認識は無く、「珍品」「玩物」また時には「戦利品」であった時代が長いであろう。そして帝国主義成立期以降、西アジア地域が古代史・考古学の研究対象地となり、西洋文明の故地として特に生産経済発祥地として再認識されるに至るまでの殆どの期間、西アジアは、事実上、欧米による考古資料の搾取対象地であった。パピロニアに始まった円筒印章は西アジア一帯に広がっていたので、その西アジアから「珍品」「玩物」また時には「戦利品」が流出すれば、そこに円筒印章が含まれていたことは、可能性として十分に考えられ得る。果たして然りである。



図3 . (左・中) ニムルド遺跡宮殿址より守門神像の搬出 (Layard 1849) (右) 大英博物館への搬入(1852年2月28日付 The Illustrated London News)

イギリス人H. レヤード(1817~1894年)が、北メソポタミアのニムルド遺跡において、英国の威信をかけてフランスと競うかのごとくその遺跡発掘に着手したのは1845年。西アジアの遺跡発掘の嚆矢である。爾来、「戦果」のほどは、発掘された様々な遺物資料が、いわば考古学的「戦利品」として自国へ運び出され、後に大英博物館における「アッシリア・ギャラリー」誕生の基となった。

たしかに、“Nineveh and Its Remains” 2 vols(Layard 1849)には、実に様々な考古学的遺物の収録

があるものの、「円筒印章」の掲載は、管見のかぎり、認められない。ところが、図録“Art and Empire: Treasures from Assyria in the British Museum”(1995年)に見られる、大英博物館所蔵油彩画「レヤード婦人の肖像」、あるいは同館所蔵「レヤード婦人旧蔵の装身具」にあつては、装身具を構成する珠のいくつかを、明らかに円筒印章と認めることができる。同図録の解説に



図4.(左)レヤード婦人像(右)レヤード婦人の装身具に転用された円筒印章ほか(Curtis and Reade 1995)

よれば、レヤードは結婚(1869年)に際し、“As a wedding present, Layard had a number of seals which he had acquired during his travels made up into a necklace, bracelet and two earrings in Victorian gold setting.”(筆者下線)。したがって、H・レヤードに関わる、すなわち最初期のメソポタミア将来品の考古資料中にはすでに円筒印章が含まれていたのである。しかしながら、この貴重な考古資料の真価が判明するまでには当然ながら幾許かの時間が必要であり、ひとつの集大成を見たのがH・フランクフォートによる前記名著であったのである。それはあたかも、G・スミスが楔形文字記載中に「洪水伝説」を読み取り、斯界ならびに世間の耳目をあつめたニネヴェ遺跡由来の「粘土板文書」が、当初は装飾の施された単なる土器片としてぞんざいにかご詰めされ大英博物館へ搬入された遺物であったことと相通じるところがある。D・コロンによれば、円筒印章のなかには「十字軍」従事者が、帰還時に西アジアよりヨーロッパへ携えたものがあつたらしく(Collon 1990)、となれば、12世紀前後期より装身具材等として知られていたこととなる。しかしながら、考古学研究対象資料としての真価が明確になるのは、西アジア考古学の先駆ヨーロッパでもやはり1900年代前半以降と看做され、これ以前はやはり珍奇な工芸品、骨董品であつたにちがいない。

Ⅱ．日本における古代西アジア研究の始まりと円筒印章

それでは、日本における西アジア考古学研究(それは「古代オリエント」研究と互いの領域が重なるところ大であるが)にあつて円筒印章はいかがであらうか。まずは、学史的に確認しておきたい。

日本における人文系考古学の始祖といわれる濱田耕作(1881~1938年)がかつて次のようにのべたことがある。

考古學のやうな敦煌的の學問に興味をもつてゐる



図5．レヤード将来の円筒印章(アッカド期)の新印影(Collon 1990)

學生は、今の世界に固より澤山はない、就中西亞考古學、楔状文字の考古學などに頭を突込む人は日本の學界には一人も居らぬのが寧ろ當り前である」(濱田 1912)

たしかに、自らの師と仰ぎその学風に心酔した大家、「イギリスで最初のアッシリア学教授」(日本基督教団出版局『キリスト教人名事典』、1986年による)と称揚されるA・セイス(1845~1933年)より、濱田は英国留学中、西アジア考古学についてその最新研究動向・成果を直々に教示されただけに、新進学究濱田の謙虚さの勝る姿勢を表わす言であるかもしれない。1912(大正元)年といえば、日本で初めての本格的学術調査(東京帝国大学の黒板勝美と京都帝国大学の喜田貞吉・濱田耕作による合同発掘)が西都原古墳群(宮崎県西都市)において執り行なわれた年にあたり、したがって、これ以前に西アジアの考古資料が日本国内で学術的な研究対象物となったとは考え難い。

では、その後はいかがであろう。「日本オリエント学会月報」3-3(1960年)所収「日本における古代オリエント研究」(板倉 1960)によれば、関わる学史は概略下記ようになる：

「1917年に法律家、古代史家の一群によって「バビロン学会」が結成され、機関紙「バビロン」が発刊されたのが日本におけるオリエント研究の第一歩」

「その後1920年代に欧米に留学した古代史・考古学・法制史等を専攻する学者のなかにはオリエント研究に興味をもつ者が次第に現れ、研究書、定期刊行物が輸入される様になり、又僅かながら遺物、遺品も将来されるようになった」

「これに刺戟されて1930年代に至ってはじめてオリエント研究を専門とする少数の学者が現れる」

「1937年にはじまる戦争の期間中は研究書の輸入は止り、戦争の激化と共に研究活動さえ不可能となって1945年の敗戦を迎えた」

「1950年代になって戦後の社会的経済的混乱がやや静まると、外書の輸入もはじまり大学その他での研究も再開」

「この間に法制史家、原田慶吉の「楔形文字法の研究」が毎日新聞の出版文化賞を得たことであつたが、世人はほとんど関心を示さなかつた」(筆者注：「毎日新聞の出版文化賞」については、その該当を確認できない。昭和24(1949)年度「朝日賞」受賞の対象とはなっている。)

「1954年の「日本オリエント学会」の結成」

「1959年には京都大学で参会者80名を集めて最初の日本オリエント学会大会が開かれた」

「東京大学は(中略)1956-7年、朝日新聞の後援により北部イラクのテルル・アッ・サラールサト Telul Eth Thalath の発掘を開始」

(三笠宮の)「著書「帝王と墓と民衆」は1956年のベストセラーになった。」

「京都大学、東京教育大学、大阪市立大学などで次第に若い研究者が育成される様になり、その或る者は50年代の末期から第一線の活動を始める様になった。」

このうち「1920年代に欧米に留学した古代史・考古学・法制史等を専攻する学者」、「1930年代に

至ってはじめてオリエント研究を専門とする少数の学者」とは、古代史・考古学分野では、例えば中原与茂九郎（1900～1988年。1928～1930年オックスフォード大学留学）、濱田耕作（1913～1916年英国留学）であろうし（前川 1988、大津 2004）、あるいは杉勇（1904～1989年）であるにちがいない。

すなわち西アジアの考古資料が日本人によって研究対象になされたのは、実質的には第二次世界大戦後ながら、萌芽的には1920年代以降と捉えられる。板倉による学史を、時代的にさらに遡って、また、さらに下る1960年代に至るまでの研究史が近年あらためて総括された（三笠宮 2000）が、これに拠っても、「1920年代以降」と考えて大過はないようである。

ただ、戦前の日本人による西アジア（＝オリエント）研究において、考古学的アプローチすなわち遺跡・遺物による人類史研究（「研究」とまでいなくても「人類史への関心」）がどのようにあったのか、その具体的事例を見出し得ないのはどうしてであろうか。学問の初期段階にあっては、今日からみれば、研究分野がほとんど未分化状態でありがちなため、考古学者、古代文字研究者等々に峻別すること自体不適格なところはあろう。しかしながら、古代文字が刻まれた文献資料、例えば粘土板（タブレット）文書、石碑、オルトスタット（石製腰羽目）そして印章等々は同時に「遺物」すなわち考古学資料である。とすれば、遺跡における出土状況や器物としての機能面等への考古学的関心・考察はいかがであっただろうか、との疑問も生ずる。やはり考古学とは、遺跡に立ち遺物を実際手に取ることから始まる、したがって日本人による「西アジア考古学」となれば、あくまで戦後以降のことであって、戦前における日本人の海外考古学は、実質、東アジアをその境域としていた、と理解すべきと、仮ながら捉えておきたい。

杉が1968（昭和43）年に著した『楔形文字入門』所収の「あとがき」は、筆者のような「考古」学徒にとって極めて注視に値する。それは、日本における古代文字研究萌芽期に、どのような研究者が、のちに日本の古代オリエント学を特に楔形文字研究分野において牽引することとなった杉にとって当時どのような存在であったかに言及している。日本考古学史上かならず名前の挙がる、例えば白鳥庫吉（1865～1942年）、原田淑人（1885～1974年）等々が見出されるのである。

大正十三年（＝1924年。筆者注）四月末のある日、震災（＝1923年（大正12年）9月1日発生の関東大震災のこと。筆者注）の廃墟にあった考古学仮研究室の隅で、前年海外留学から帰朝されたばかりの原田淑人先生が、外国の考古学界の現状からみてオリエント研究をしきりにすすめてくださったことは、終生忘れられぬ思い出であり、その後もこの方面の書籍をつとめて研究室に買い集めてくださった（後略）

論が冗漫になったが、すなわち日本にあっては、古代西アジア地域特有の「円筒印章」を考古学的研究対象資料として見出し得るのは、1945年以降、西アジアの古代史研究を実質起動させた「楔形文字」の書材のひとつとして注視されていた可能性を考慮しても、それは1920年代を上限とみなすべきと一応考えておきたい。

Ⅲ．小説への登場形態事例 - 1．井上靖（1907～1991年）「古い文字」における「円筒形印章」

筆者は、一般社会が「考古学をどのように受容し、そこにいかなる考古学像を持ってきたか、そして何がそれを作らしめたか。これらもまた学史的考察の対象となるのではないだろうか。」（大津 2010）という課題で、これを文学との関わりより考究し、試論を提示してきた（例えば、大津 2009）。本論もその一環として、既述したような背景を有する「円筒印章」の登場するふたつの作品をここにとりあげる。ちなみに、該当 2 作品は恣意的に選別したものではなく、筆者がこれら以外の作品を未だ知らないからであって、さらなる文学作品の具体例把握を向後に期待しているところである。

『井上靖全集』第六巻所収「解題」によれば、作品「古い文字」は「昭和37年12月1日発行の『文藝』12月号（第16巻第12号）および昭和39年6月1日発行の同誌6月号（第18巻第6号）に分載発表」された（曾根1995）。物語は、官費留学の終わりをひと月後に迎える主人公（大乃岐光矩）が、日本から時期をあわせて留学先のフランスへやって来た妻（百合枝）共々、スペインを訪れ各処を車で見物するところから佳境へ入って行く。ふたりは、グラナダから170キロの街モントリルへ至り、さらに車で30分ほど走りサロブレニヤという部落へ入っていった。住人はアラブ系と思われる顔立ち。車を降りるや、たちまち多くの子どもたちに取り囲まれる。そこで主人公が「円筒形印章」を見出すのである。[以下、引用各文末尾のカッコ内は『井上靖全集』第六巻（新潮社、1995年）所収の該当ページを表わす。]

① 「古い文字」における「円筒形印章」の資料的実在性

百合枝は最後に大乃岐を十一、二歳の^{はだし}裸足の子供と並ばせ、それにカメラを向けたが、その時大乃岐は、自分の横に立っている子供の首から紐で吊るされている小さな首飾りに眼を付けて、その方へ手を伸ばした。（中略）小指の頭ぐらいの大きさの石であった。（中略）ちょっと貸してごらんというように手で合図した。子供は素直にその紐を自分の首から外した。手に取ってみると、石は^{めのう}瑪瑙であり、大きく欠けてはいたが、明らかに円筒形印章と思われるものであった（370頁）

大乃岐はこの「円筒形印章」に文字があることに気付き、子供の祖母を通じ計100ペセタの金でこれを買取る。爾後の面倒を危惧するあまり早々にその場をあとにした主人公はモントリルへ引き返す。

ホテルの部屋へはいると、それから夕方までの時間を自分が手に入れた印章を弄り回して過した。驚きは急速に大きくなって行った。（373頁）

この印章の貴重さ、そして入手できたことの重大性を主人公はつぎのように確認する。

円筒形の^{めのう}瑪瑙の表面に描かれた人物の絵の下の二種類の文字のうち、一つは、一端が太く他端が細く尖っている^{くさび}楔型の文字で、紛れもなくアッカドの文字であり、それはサルゴンと読まれた。大乃岐は古代の文字ではアッカドの文字と、ミノア文字の一部をこの二、三年手がけていたので、それを読むことは何でもなかったことであった。サルゴンと読まれる以上、南メソポタミアの帝王の名前であるに違いなかったし、そのアッカド文字の上に同じように三つ描かれている人物は、帝王サルゴンの像ということになるろうかと思われた。大乃岐は帝王の像と、アッカド文字でその名が刻まれている印章の^{かけら}欠片を発見したということだけでも容易ならぬことに思われたが、アッカド文字の下に並んでいるもう一種の絵文字と言ってもいい単純な線で組立てられている奇妙な文字が、世界で未だ解読できないでいるインダス文字以外の何ものでもないと思った時は、思わず息を飲む思いだった。(373 - 374頁)

インダス文字と思われるものは二字しかそこに見出すことはできないが、たとえ二字でも、その意味を想定することができると思えば、それは大変な事件(後略)(373頁)

まさしく石は^{めのう}瑪瑙である。大きく欠けてはいるが、何回も自分の眼で改めたように円筒形印章である。石の切断面には、紀元前二三五〇年頃の王である帝王サルゴンの像が刻まれ、その下にアッカド文字とインダス文字が刻まれている。アッカドは明らかにサルゴンと読まれる。サルゴンと読まれる以上、インダス文字もまた、サルゴンと読まれるべきものであるに違いない。恐らくそう判定して誤りはないと思われる。(383頁)

大乃岐の見立ては確かなものであったにちがいない。なぜならば、「アッカド文字」を「読むことは何でもない」専門家(前出)で、しかも「パリへ留学する前年にその二つの遺跡(引用者注: ハッラッパー遺跡およびモヘンジョ・ダロ遺跡のこと)のいずれも自分の眼で見ている」(376頁)ほどの熱心な研究者であったからである。そして、大乃岐の印章資料観察、とくに「一個の印章にアッカド文字とインダス文字の二つが書かれてあった」(377頁)ことへの問題解決、合理性考究へと向かう。

サルゴンは紀元前二三五〇年頃の王であり、この頃インダス川流域ではインダス文字が使用されていたことは既に明らかにされている事実である。(中略)この二つの文字が一つの印章に刻まれてあってもさして不思議はない(377頁)

さらにここで一つの重要な疑問が生ずる。アッカド文字、インダス文字が刻まれた円筒印章が、「どうしてスペインのアラブ部落で発見されたのか」(377頁)という問題である。これについて大乃岐の解釈は、それはすなわち作家井上靖自身の解釈となるわけだが、次のようであった。

往古一人の回教徒が巡礼の途中、バグダッド、エルサレム、メッカ、カイロ、どこか判らぬがともかくそういった場所で、この印章を手に入れる。土産物として買ったかも知れないし、仲間から買ったかもしれない。そして彼自身が、あるいは彼の子孫が、最初スペインへ移って来たアラブの一人として、印章をスペインへ持ち込む役割を担う。これは当然八世紀のこととしなければならない。それからアラブはスペインに於て何世紀かに亘って盛衰の歴史を繰り返す

が、印章はまたそれのお相伴をし、その半身を失いながらも、不思議に今日まで生きのびる。
(377頁)

「古い文字」に登場する「円筒形印章」は、「円筒印章」の意味にまちがいない。もちろん、作品の結末にあるように「古い石の欠片が、インダス文字解読の鍵となるような貴重なものであったか、あるいは多分に神経衰弱気味であった大乃岐光矩の妄想が生んだ幻覚であったかは、それが失われている現在では残念ながら知ることはできない」(389頁)という設定、つまり資料は失われ現存しないこととなっている。この文学作品中の当該円筒印章の考古資料的描述は史実に照らしてどのように捉えるべきであろうか。

そもそも、このような円筒印章が実在するのか。それは「否」であろう。あてはまる考古資料の学術的正式報告を、管見のかぎり、筆者は未だ見出し得ない。また、インダス文字が依然として未解読文字であること理由のひとつとして、「バイリンガル(二言語併記)の資料がないためである。メソポタミアの楔形文字やエジプトのヒエログリフ(聖刻文字)の解読には、ペルセポリスの碑文やロゼッタ・ストーンなどの多言語併記の資料が重要な鍵となっていた。ところが、インダス文字に関しては、メソポタミアのシュメール文字あるいはイランの古代エラム文字などといった、同時期の周辺地域で通用していた言語とのバイリンガル資料がまったく見つかっていない」(菊池2003)とも考えられている現況からである。この点においては確かに「古い文字」をフィクションとみなすべきながら、この種の井上靖作品の常套として、物語の進行には史実・事実がなめらかに織り交ざる。

② 「古い文字」の物語はいつの時代設定か

「古い文字」は、前述したように、昭和37年(=1962年)および昭和39年(1964年)「分載発表」された。では、物語結末部分に言う「若い考古学者大乃岐光矩がセビリヤから五二キロ離れたカルモナの町の城門の付近で心臓麻痺のために倒れたのは、五年前の秋である」(389頁)とは、一体いつの事と考えるべきか。作者井上靖はこの作品中、「〇〇年××月、何某は…」という具合に、物語に特定の年月を明記してはいない。したがって、敢えて判断の糸口をさぐるとすれば下記のくだりかもしれない。

コルドバには十年程前に発掘されたアザハラ宮殿の遺跡があり、そこを見ることができるのがコルドバに行く場合の魅力の一つであったが、大乃岐は十六、七世紀のアラブの遺跡などは、いまは何の興味も感じなくなっていた。(379頁)(傍点は引用者)

アザハラ宮殿は紀元九三六年から二十五年の日子を費やして造られた宮殿で、当時のアラブの権力者が愛人アザハラを住ませるために造ったものであった。(中略)宮殿の跡は千年程土に埋もれていたが、十年程前に掘り出され、(攻略)(387頁)(傍点は引用者)

これらのくだりは、後ウマイヤ朝の第8代君主アブド・アッラフマーン三世(在位912~961年)がその都コルドバ郊外に「アザハラ宮殿」すなわち宮廷都市として知られる「マディーナ・アッザ

フラー」を建設したこと、そして廃墟と化した宮殿址が10年ほど前に発掘された、と言う意味に解すべきであろう。物語進行時より「十年程前」と解すれば、「アザハラ宮殿」遺跡の発掘調査開始年は1911年と一般的にいわれており、これより起算すれば「古い文字」の物語進行時代は1921年すなわち大正10年となる。しかしこれでは先述の日本におけるこの分野の研究史に照らしてあまりにも非現実的であろう。

これについては奇妙なことがある。いま、文春文庫『崑崙の玉』（第3刷、1978年、文藝春秋）所収版「古い文字」における該当部分を参照すると、「宮殿の跡は千年程土に埋もれていたが、十年程前に掘り出され、（攻略）」（『井上靖全集』第六巻387頁）該当部分については、「五十年程前に掘り出され」（傍点は引用者）となっている。そして『井上靖全集』第六巻の巻末「解題」には、387頁の「十年程前」が「五十年程前」より改訂された旨の記述がある。確かに、文春文庫所収版においては、同一事項が異なる経過年で記載されるという不具合（誤記？）が生じている。それではなぜ「十年程前」に「訂正」されたのか？いまかりに、「五十年程前」と記載を統一・訂正すれば、物語の舞台は1961年（頃）となり、日本人による西アジア考古学研究史の現実に旨くかみ合うばかりでなく、昭和37年（=1962年）および昭和39年（1964年）というこの作品の発表年に近く自然である。

③ 井上靖「古い文字」の前後

「古い文字」が発表された1960年代前半期、これに先んじて例えば前述のような原田著「楔形文字法の研究」の顕彰（1950年）や三笠宮著「帝王と墓と民衆」のベストセラーがあったものの、これらの研究対象資源、一次資料である楔形文字の一般社会への認知度は決して高くはなかったと考えられる。円筒印章の専門家、好事家はその頃我国にはたして居たであろうか？試みに円筒印章研究家や専門の古美術商関係者に問うても不詳の回答しか得られない。そのようななかで、1960年代の早い時期に円筒印章を楔形文字と併用して作品に機能させた「古い文字」は、そのストーリーの展開、大胆さに驚愕を覚えさせられるのはひとり筆者のみであろうか。これまた井上靖の「西域もの」、なかでも「古器物の醸し出す遙か時空を超越して存在し得る世界」（大津 2005）を具象する作品のひとつとして、鑑賞するものを魅了するのである。

この系譜の如何を考える時、同作家による「古い文字」に先行する二作品、すなわち「漆胡樽」（1950年4月号『新潮』掲載。1947年発表の詩「漆胡樽 正倉院御物展を觀て」とは別作品）および「玉碗記」（1951年8月『文藝春秋』掲載）は注視すべきであろう。このうち「漆胡樽」は、「考古学者で漆を専門にやっている」戸田竜英なる、やや変人との評を持つ男が、正倉院の特別観覧日、展示品の漆胡樽に魅せられた新聞記者の「私」に、漆胡樽が正倉院へ包蔵されるまでの来歴をオムニバス風に講ずる設定である。実は、この作品誕生にも関連して、作家自身が次のように言及したことがあった。

私は以前にも正倉院の「漆胡樽」を見た時やはり同じように、それが東漸の経路を小説に書いてみたいと思って、同名の小説に書き上げたことがある。この方は漆胡樽そのものが何に使用されたものかさえも判らず、江上波夫氏のお宅に伺って、江上氏の意見を伺ったり、美術研究

所の松下隆章氏はじめ何人かの方々からそれについての考えを聞かして貰ったりして、全く初めから仕舞いまで、自分の自由な想像で小説に書いてしまった。漆胡樽の方は往古沙漠地方で使われた飲料水の容器であろうくらいのことしか知られていなかったの、前記の専門家諸氏の意見を伺っただけで、のびのびと筆を走らせることが出来たが、「玉椀記」の方は、それが発見された直後ではあったし、それが学界から注目されるべき価値を持つようとしている矢先であっただけに、あまり自由な想像を駆使することができず、作品としては自分ながら多少窮屈な感じのものになってしまったかと思っている。(井上 1973)

小説「漆胡樽」中の「私」は多分に作家自身と考えられよう。ここに見られるように、執筆にあたって井上靖は「専門家諸氏の意見を伺い(同前)、そのなかに、日本人によるフィールド・ワークを伴う西アジア考古学研究の開始者江上波夫、すなわち、既述「東京大学は(中略)1956-7年、朝日新聞の後援により北部イラクのテルル・アッ・サラサト Telul Eth Thalath の発掘を開始」した中心人物が含まれていたことは、「円筒印章」もまた作家へのあらたな題材として前出の江上あるいはその周辺より具体的にもたらされたのではないかと、そして1950年代後期の学界動向と相俟って作品化したとは考えられないであろうか。

円筒印章のもつ印鑑的機能は、古来伝統的に中国、日本にもあることはすでに多くの集成資料により証明されている。古代中国で最高位の印材と崇められた「玉」すなわちヒスイ等の貴石と、円筒印章の印材もまたその多くが装身具に併用・転用された美しい石であったという、これら共通するところ、ならびに「円筒印章」は小さいながらもそこに込められた文字、デザインの意味するところの豊かさこそ、作家の「自由な想像」を大いに刺戟したにちがいない。

IV . 小説への登場形態事例 - 2 . 松本清張 (1909 ~ 1992年) 「礼遇の資格」における「シリンダー・シール」

先述の井上靖以外に「円筒印章」の登場する小説を検索すると、松本清張が『小説新潮』1972(昭和47)年2月号に発表した短編推理小説「礼遇の資格」を挙げることができよう。この作品は、「礼遇の資格はあるが男の魅力に欠ける夫と、その肩書だけを目当てに結婚した浮気な妻との間に生じた殺意を描く心理サスペンスの秀作」(郷原2005)、あるいは作品のトリックについて「この著者のアイデアは秀逸の部にちがいない」(中島 1977)と評されているものである。小説中、シリンダー・シール(円筒印章)は主人公(原島栄四郎)の骨董コレクションのひとつとして登場する。作者は登場人物の語りをも通して、当該円筒印章について解説するのである。[以下、引用各文末尾のカッコ内は新潮文庫『巨人の磯』(新潮社、第5刷、1978年)所収の該当ページを表わす。]

(カイロで購入した骨董品を客に見せる場面) その一つに高さ二センチと三センチばかりの石の筒があった。一つは丸煙草シガレットくらいの太さの蒼黒い石で、一つは万年筆の軸あおぐろくらいの太さの白っぽい石だった。どちらも軸の中心に穴が貫通していた。さて、その円筒のぐるりには模様が陰刻してあって、ちょっと見るだけでは何の図柄が分らないが、それを柔らかい粘土おに擦って転

がしてみると、粘土の上にはっきりと絵柄が浮彫^{リリーフ(ママ)}の連続となっていて出てくるのである。小さい円筒石のは、古代オリエントの男子像と婦人像とがならび、大きい円筒石のほうは動物と弓を持った狩人とがならんでいた。(63頁)

これはね、紀元前三千年くらいのアッシリアの紋章です。当時の王さまや貴族がそれぞれの紋章を職人に彫らせて、印形^{いんぎょう}がわりにしていたんですね。この穴に紐^{ひも}を通して持っていたでしょう。シリンダー・シールといいましてね。蒼黒い石が閃緑石^{せんりょくせき}で、白っぽいのが大理石です(63頁)

今から五千年も前に、虫眼鏡も無しに、こんな小さなものが精巧に彫れるなんて驚異ですね。このシリンダー・シールをカイロの骨董屋で手に入れたときは、ありがたかったですね。掘出し物ですよ。日本でもこういうのを持っている人は数少ないでしょう(63頁)

(妻は軽蔑して)五千年前のアッシリアの小さな石彫刻が何だろう。模様は、ただの模様ではないか。夫は、自分に隠しているが、四センチにも足りないこの二つの円筒石に二百ドルは確実に出したと思われた。二百ドル!

井上靖「古い文字」から松本清張「礼遇の資格」までの10年という時間は、円筒印章の呼称を「円筒形印章」から「シリンダー・シール」へと改変している。また、「礼遇の資格」における円筒印章描述は、主人公(原島栄四郎)の他の骨董コレクション共々のかなり細やかである。これは、松本清張が、作中登場のこれら品々を自ら購入し所有物としていたからにはかならない。入手経緯については、『週刊文春』1977(昭和52)年1月6日号所収「クレオソートと玉碗 正倉院とイランの古美術店」に次のようなくだりがある。

ダマスカスのバザールは石だたみの道にならんでいる。上に天幕が覆っているので店はまことに暗い。ここの古物屋に入ってわたしは円筒印章を二つ買った。円筒印章はシュメール時代(ほぼ前三千年)からメソポタミア地域におこなわれた王侯の印章で、小さな石製の円筒に人物や動物や楔形文字^{せつげい}を彫刻してある。これを濡れた粘土板の上に転がすと美事な浮彫^{レリーフ}の文様があらわれるのである。とぼしい旅費(当時海外旅行の持ち出し額は五百ドルまでだった)のなかから買ったので二個で三十ドルくらいだったか。」

1969年4月以降、ドル持出し制限が700ドルに緩和されたことに照らせば、上記事項は折りしも海外渡航自由化になった1964(昭和39)年に、松本清張が初めての海外旅行先のひとつとして西アジアを訪れた際の、あるいは翌1965(昭和40)年に再度西アジア訪問した際のことと考えられる。いずれにせよ、1960年代には、関心がありかつ経済的に叶う者は西アジアの考古資料を日本へ将来できるようになったことを知ることができる。

とはいえ、松本清張の関心物のひとつに、それではなぜ「円筒印章」があったのか。これについては、『青のある断層』(松本清張短編全集2、光文社、1963年12月15日初版)所収「あとがき」に注視すべき松本自身の述懐がある。

(前略)「梟示抄^{きょうししよ}」は、第一巻後記にもふれたように、まだ小倉にいるときの作である。(中略)

「^{ごんさい}権妻」もやはり第一巻後記にふれているが、これは長いこと『オール読物』の“組置き”^(ママ)となつて埃をかぶっていたらしい。すると、ある月に有力作家の原稿が急にはいらなくなり、その穴埋めにこれが陽の目をみたと聞いている。当時、編集会議の席上、この作を推してくれたのが、ある婦人編集者で、私のことを第二の井上靖になるだろうと言ったそうである。井上氏には迷惑かもしれないが、私はそれを聞いて満足した。実際、私は井上靖氏の出現がなかったら、何を目標にして作品を書いていいかわからなかった。井上氏によって私の行く道は決定したと言ってもよい。

なお、上記中の時代小説「権妻」は『オール読物』1953年9月号掲載作品である。井上靖は松本清張にとって「目標」たる、そしてみずからの「行く道」を決定した作家であったと明白に述べている。したがって「円筒印章」の登場や、井上靖著「玉碗記」に共通した題材のエッセイ「瑠璃碗記」(『太陽』所収、1966年)ほか、西アジアの古代史と日本との関係、「シルクロード」関連作品が松本清張にも多いことは首肯されるのである。ただし、松本清張「礼遇の資格」における円筒印章は、登場する器物の役割としては、「コプト織」にその主役を譲っている観がある。作品発表の1970年代と関わりがあるのか否か、これについては稿を改めたい。

【参考文献】

- 井上 靖 1973年、「安閑天皇の玉碗」、『歴史小説の周囲』、講談社。(初出は1953年1月『藝術新潮』)
- 井 博幸 1988年、「テル・グッパ出土の印章および印章印影」、『ラーフィダーン』第9巻、国士舘大学イラク古代文化研究所。
- 板倉 勝正 1960年、「日本における古代オリエント研究」、『月報』第3巻第3号、日本オリエント学会。
- 大津 忠彦 2004年、「セイス来朝と濱田耕作 日本における中近東考古学研究の系譜」、『山下秀樹氏追悼考古論集』、山下秀樹氏追悼論文集刊行会。
- 大津 忠彦 2005年、「小説に読む考古学 世評と資料性」、『小説に読む考古学 松本清張文学と中近東』(大津忠彦編著) 中近東文化センター。
- 大津 忠彦 2009年、「小説『内海の輪』に読む考古学」、『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第4号、筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部。
- 大津 忠彦 2010年、「野上弥生子著『真知子』における考古学像とその背景」、『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第5号、筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部。
- 小野山 節 1985年、「円筒印章と考古学」、『西南アジア研究』第24号、西南アジア研究会。
- 小野山 節 1996年、「ジャムダド=ナスル期タブレットの印影と円筒印章」、『オリエント』第39巻第1号、日本オリエント学会。
- 菊池 徹夫 2003年、『文字の考古学Ⅰ』、同成社。
- 郷原 宏 2005年、『松本清張辞典決定版』、角川書店。
- 定金 右源二 1962年、(訳本紹介)「H・フランクフォート「古代オリエント文明の誕生」」、『オリエント』第5巻第1号、日本オリエント学会。
- 曾根 博義 1995年、「解題」(所収：『井上靖全集』第六巻、新潮社、1995年)
- 中島 河太郎 1977年、「解説」(所収：松本清張『巨人の磯』、新潮文庫第5刷、1978年)

濱田 耕作 1912年、「セイス老博士」、『藝文』第3年第4号、京都文學會。
前川 和也 1988年、「中原与茂九郎先生を偲んで」、『西南アジア研究』第29号、西南アジア研究会。
三笠宮 崇仁 2000年、「日本における古代オリエント文明研究史」、『オリエント』第43巻第2号、日本
オリエント学会。

Basmachi, F., 1975/1976, *Treasures of the Iraq Museum*, Directorate General of Antiquities, Baghdad.

Chiera, E., 1938, *They Wrote on Clay*, University Chicago Press, Chicago.

Collon, D., 1987, *First Impressions: Cylinder Seals in the Ancient Near East*, London.

Collon, D., 1990, *Near Eastern Seals. - (Interpreting the Past)*, British Museum Publications Ltd., London.

Curtis, J., and Reade, J., 1995, *Art and Empire: Treasures from Assyria in the British Museum*, Metropolitan
Museum of Art, New York.

Layard, A., 1849, *Nineveh and Its Remains*, 2 vols. John Murray, London.

本論は、筑紫女学園大学・短期大学部 平成22年度「特別研究助成費」を受けて実施した研究の成果報告であり、参考とすべき円筒印章の資料調査・来歴考察等に関し、北九州市立松本清張記念館の中川里志氏、古代オリエント博物館（東京）の石田恵子氏、ならびに金澤健一氏からは有意義なご助言を頂くことができました。また、大英博物館中東部長 John Curtis 氏からは、同館所蔵資料の図版使用（本論図4）に関しご便宜頂きました。記して御礼申し上げます。

なお、本論中においては敢えて敬称を省略致しました。また、引用文において、旧字および異体字を、原典と違って混用したところがあることをお断り致します。

（おおつ ただひこ：筑紫女学園大学文学部アジア文化学科教授 Ohtsu@chikushi-u.ac.jp）